



二人の国王が争えば、憎しみで世の中は二つに割れ、
復讐の神々がのさばるようになる。
これが呪わしい国王の運命。

—自分たちのための「二者択一」—

作品中、臣下バーリーは、エリザベスへこんなことを進言します。「マリアーとは決して和解はできません。陛下は打撃を与えられるか、与えるかしかありません。陛下が生きればあの人（＝マリアー）は死に、あの人人が生きれば陛下が死ぬのです。」

どうしてこうも極端な「二者択一」なのだ？ もつと他の選択肢もあるのではないか？ と、思ってしまいます。バーリーは、エリザベスが庶子（妾の子）で、正統な血筋にあるマリアーを危険視しました。そしてもう一つ、エリザベスもバーリーもプロテスタント信徒であることが重要な要素のようです。エリザベスが即位する前の女王はカトリック信徒で、プロテスタント信徒を厳しく迫害していました。バーリーはきっとその頃、随分と苦しい経験をしたのでしょうか。だから、カトリック信徒であるマリアーに対しても、厳しく対処しなければ、自分たちがまた危うくなると考えた。そういう説もあります。しかし、いずれにしても「二者択一」とは本当に不自由な考え方だと思いますか？

ボクたちの暮らす社会に目を向けてみます。近頃、質的にも量的にも「二者択一」を迫られることが多いような気がします。以前なら、もつと時間をかけて、緩やかに物事は進められていましたように思います。気のせいなのでしょうか。イエスか、ノーカ。今やるのか、やらないのか？ 出来るのか、出来ないのか？ 厳しい「二者択一」をしなければならない空気が、ボクたちの社会を覆つているように感じます。

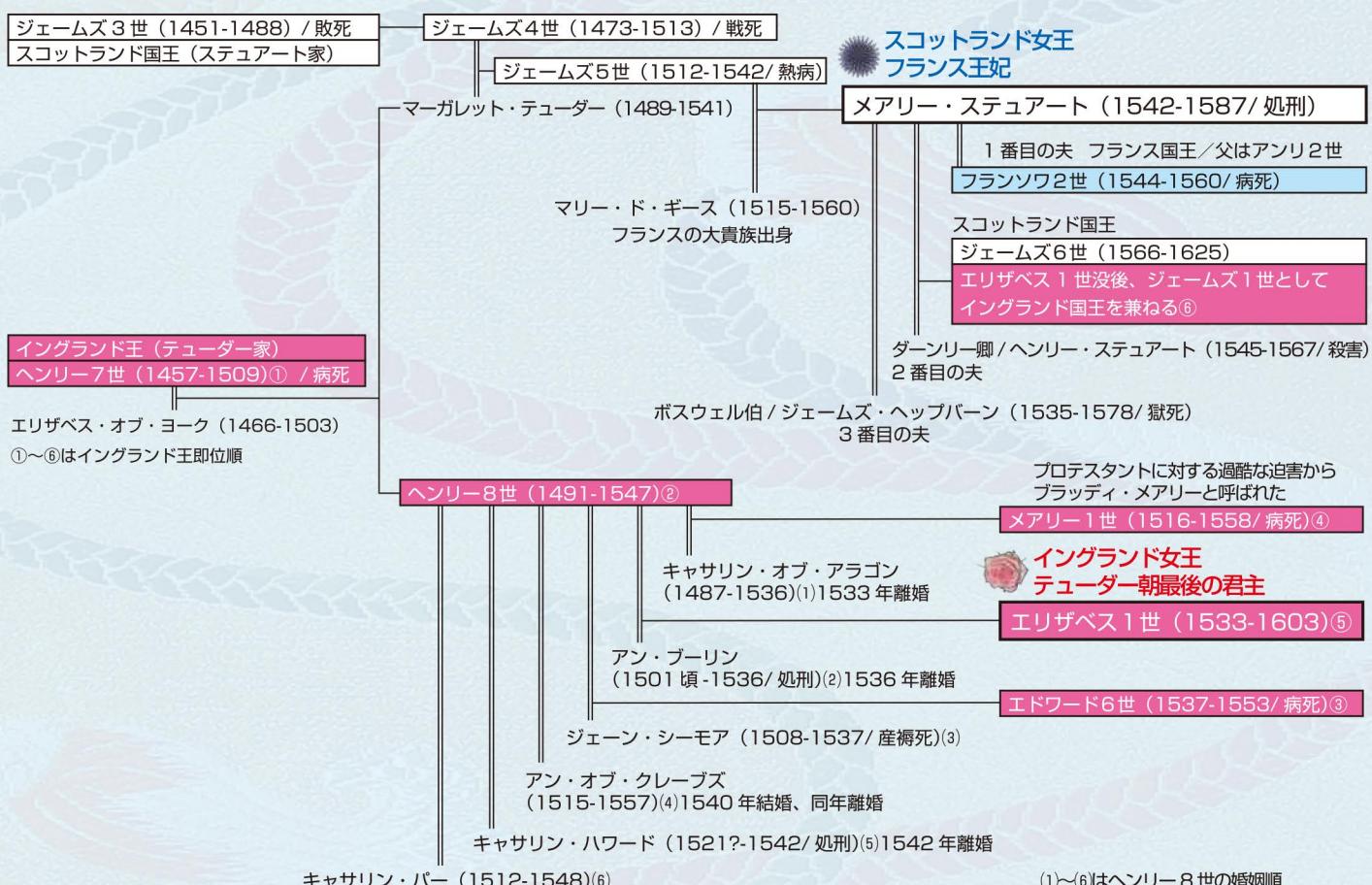
少し理由を考えてみます。あらゆる分野でデジタル化やコンピュータ技術が進んでいる影響で、ボクたちの思考回路もデジタル化（簡略化）され、ゼロとイチで判断するようになってしまったのかもしれません。時間も空間も圧縮され、効率化を今まで以上に求められ、逆に求めるようにもなっているからではないでしょうか。判断は今すぐ。費用対効果、選択と集中。この道を進むのか、進まないのか？ 賛成か、反対か？

資本主義経済が《高度に》発達し、ボクたち自身がデジタル化された労働力として極限まで搾取されています。日々の暮らしに疲弊し、追い詰められ、ボクたちは冷静な判断さえ出来ず、目の前に同じように苦しむ人が居たとしても、手を取り合う余裕さえないのでないか、と、考えてしまいます。何だか不自由です。本来、ボクたちはもつと自由な発想のもとに暮らしてよいはずではないでしょうか。

ボクたちが求めている社会はこのようなものだつたのでしょうか？ 今こそ、自分たちのために「二者択一社会」を二者択一すべき時なのかも知れません。二者択一社会を「選ぶ」か「選ばないか」？ もつと自由を！

田中孝弥

マリアー・ステュアートとエリザベスの家系図



2人の女王の生涯（史実）

メアリー・ステュアート

エリザベス1世

1542年 12月8日、スコットランド王ジェームズ5世とメアリー・オブ・ギース（フランス貴族出身）の子として生まれる。生まれてすぐ父が急死し、生後6日にして女王に即位。	1533年 9月7日、ヘンリー8世とアン・ブーリンの子として生まれる。
1548年 6歳の時、フランス皇太子フランソワと婚約。以後、フランス宮廷で育てられた。	1536年 母アン・ブーリンが処刑される。エリザベスは王位継承権を剥奪される。
1558年 フランス皇太子フランソワと結婚。この年、エリザベス1世がイングランド女王に即位すると、フランス王アンリ2世は、「庶子（妾の子）であるエリザベスの王位継承権には疑義があり、したがって、ヘンリー7世の曾孫であるメアリーこそイングランド王位の正統な継承者である」と抗議。イングランド国内にも疑義を唱える貴族があり、エリザベスの政権は不安定であった。それ故、メアリーがエリザベスを「庶子」と主張することは政権を揺るがす政治的問題であった。またローマ法王を含む多くのカトリック教徒もメアリーをイングランド女王であると考えていた。	1543年 王位継承権が復活。
1559年 フランス王アンリ2世が亡くなり、皇太子がフランソワ2世として即位。	1547年 異母弟エドワード6世、即位。
1560年 夫・フランソワ2世が病死。	1553年 エドワード6世、死去。 ジェーン・グレイが即位するもまもなく廃位。 異母姉メアリー1世、即位。
1561年 スコットランドへ帰国。	1554年 ワイアットの乱への関与を疑われ、ロンドン塔へ幽閉される。
1563年 エリザベスはメアリーの再婚相手にレスター伯爵を推薦する。しかし、メアリーはレスター伯爵がエリザベスとの愛人である噂を耳にし、結婚を拒否する。	1555年 メアリー1世のプロテスタント迫害が始まる。 軟禁を解かれる。
1565年 ダーンリー卿と再婚し、スコットランド王の称号を与えるが、嫉妬深く横暴な夫の性格がわかるにつれて、メアリーの心は離れていく。やがて、メアリーは秘書であり音楽家のリッティオを寵愛するようになる。	1558年 メアリー1世、死去。イングランド王位を継承する。
1566年 ダーンリー王、リッティオをメアリーの目の前で殺害。メアリーは流産の危機を乗り越え、ジェームズ1世（後のイングランド王兼スコットランド王）を出産。その後、メアリーはボスウェル伯爵に心を寄せるようになる。	1568年 イングランドに亡命したメアリー・ステュアートを幽閉する。その理由は第一にメアリーの方がイングランドの王位継承者として優位な立場にあったこと。第二に、メアリー1世の恐怖を覚えており、カトリック勢力を抑えなければならない立場にあった。
1567年 ダーンリー王が暗殺される。首謀者はボスウェル伯爵とみられていたが、メアリーは法廷に於いて、有無を言わせず、ボスウェルの無罪を宣告し、その後、ボスウェルと再婚する。不平に思う貴族達は叛乱を起こし、ボスウェルは逃亡。メアリーはスコットランド王位を失い、一旦は幽閉されるが、機を見て、脱走する。	1579年 フランス王の弟アンジュー公フランソワから求婚を受ける。
1568年 イングランドのエリザベス1世の元に亡命。メアリーはイングランド各地を転々としたが、軟禁状態とは思えないほど自由に近い生活を送ることが許された。しかし、たびたび、イングランド王位の正統な継承者であることを主張し、また、エリザベスの廃位の陰謀に関与した。	1586年 バビントン陰謀事件が起こる。メアリー・ステュアートの関与を示す証拠を摘発。
1586年 バビントン事件が起り、メアリーの関与を示す証拠が摘発され、死刑判決が下る。エリザベス1世はしばらくその宣言書に署名することを躊躇するが、結局、これを断行。	1587年 メアリー・ステュアートを処刑。
1587年 2月8日、メアリーは処刑された。（享年44歳） なお、史実ではエリザベス1世はメアリー・ステュアートと一度も面会していない。	1588年 レスター伯爵ロバート・ダドリー、死去。

—バビントン陰謀事件—

1586年、プロテスタントであるエリザベス女王1世を暗殺し、カトリックであるスコットランド女王のメアリー・ステュアートをイングランド女王に即位させようとした陰謀事件。首謀者はカトリックの聖職者ジョン・バラードと、熱心なカトリック信者の青年アンソニー・バビントンだった。彼らは、イングランド内のカトリック信徒の反乱やスペイン軍の支援を得て、計画を進めようとしたが、フランス・ウォルシンガム（イングランドの諜報機関）によって、探知され、一味は逮捕、処刑された。バビントンとメアリーは手紙を暗号で書いてやり取りしており、エリザベス暗殺に直接同意したメアリーの手紙もウォルシンガムの手元に渡っていた。メアリーもこの事件がきっかけとなり、翌1587年処刑された。なお、本作品『メアリー・ステュアート』の中では、メアリーはバビントンたちの犯罪に加担していない設定になっている。

登場人物・出演者紹介

(※アルファベット部分はドイツ語原文表記にしています。)



エリザベス Elisabeth…林英世
イングランド女王。



メアリー・スチュアート Maria Stuart…竹田朋子
イングランドに幽閉されているスコットランド女王。



レスター伯爵 Leicester
(ロバート・ダドリー) …高口真吾
エリザベスの寵臣。
密かにメアリーへ心を寄せている。



バーリー卿 Burleigh
(ウィリアム・セシル／大蔵卿) …
阿部達雄
エリザベスの臣下。
メアリー処刑を推進している。



シュルーズベリー伯爵 Shrewsbury
(ジョージ・タルボット) …
西田政彦
エリザベスの臣下。
かつて、メアリー監視役を務めていた。
メアリーへの恩赦を求めている。



アミアス・ポーレット
Amias Paulet…上田泰三
メアリー監視役の騎士。



音楽・演奏…仙波宏文

ウィリアム・デイヴィソン
Wilhelm Davison…オオサワシンヤ
エリザベスの侍従。

オーベスピーヌ伯爵 Aubespine…オオサワシンヤ
フランス公使。



モーティマー Mortimer…倉増哲州
ポーレットの甥。
密かにカトリックに改宗し、
メアリー救出を企む。

特別協力…森和雄・大野亞希

あらすじ

スコットランド女王メアリー・ステュアートは、夫・ダーンリー王暗殺に加担したとして国を追われ、従姉妹にあたるイングランド女王エリザベスの元へ亡命した。ところが、エリザベスよりも正統な王位請求権を持つとされるメアリーは、直ちに幽閉され、今に至っている。

第1幕 フォザリングイの城の一室／処刑2日前

「バビントン陰謀事件（エリザベス女王暗殺計画）」に関与したとして、裁判にかけられているメアリーを、監視役のポーレットが厳しく見張っている。メアリーはポーレットへ「エリザベスとの会見を求める」手紙を託すが、ポーレットはつれなく去っていく。

メアリーは冷淡なポーレットの姿に、かつての夫・ダーンリー王の姿を見る。ダーンリー王は結婚後すぐに、嫉妬深く粗暴な性格を露わにし、メアリーの心は離れていた。そして、メアリーが音楽家リッティオを寵愛し始めると、ダーンリー王はリッティオ殺害に及ぶ。メアリーは激怒し、ダーンリー王暗殺に間接的に加担した。しかし、その行為が軽率ではなかったかと、今も後悔し続けている。そこへ、密かにカトリックへ改宗したモーティマー（ポーレットの甥）が現れる。モーティマーは、自分がメアリーを救出すると宣言する。血気に逸る青年の姿にメアリーはかえって戸惑い、以前より心を寄せていたレスター（エリザベスの寵臣でもある）に相談するように促す。エリザベスの重臣バーリーが現れ、「バビントン陰謀事件」の裁判で、メアリーに死刑判決が下ったことを告げる。だが、メアリーはカトリック信徒の自分をプロテスタント信徒たちだけで裁くこの裁判は不当だと訴える。既にメアリーの秘書たちからの証言も得ていると、バーリーは説明するが、メアリーはその証言も偽りだと主張する。そして再び、エリザベスとの会見を要求する。

第2幕 ウエストミンスターの宮殿／処刑1日前

フランス大使オーベスピーヌ伯爵がエリザベスの元へ訪れ、主君アンジュー公（フランス王アンリ2世の息子）の求婚に対し、確約を示す何らかの印を預かりたいという。エリザベスは生涯独身であることを望んでいるものの、フランスとの外交や、自身の政権の不安定さを考慮し、指輪を与えることで、ひとまず解決を図る。枢密院会議にて、バーリーはエリザベスに宣告書（死刑執行命令書）への署名を要求する。しかし、かつてのメアリーの監視役であった賢者シュルーズベリーは、これに反対し、むしろメアリーに恩赦を与え、女王としての徳を示すべきだと訴える。

そこへ、モーティマーが現れ、エリザベスに拝謁する。モーティマーは、熱い眼差しで女王への忠誠を誓う。エリザベスはモーティマーを信用すると、人払いした後、メアリーと通じているとも知らず、彼にメアリー暗殺を命じる。その後、モーティマーはエリザベスの寵臣レスターと密会し、メアリーからの手紙を渡す。レスターはエリザベスがアンジュー公と結婚するかも知れない今、自分の立場に危うさを感じ、次第にメアリーに心を寄せるようになっていた。レスターはメアリー救出計画への協力をモーティマーに約束し、エリザベスにはメアリーと会見するように促す。

第3幕 庭園の一部。／処刑1日前

メアリーが庭園に姿を現す。ポーレットが、今からここでエリザベスとの会見が行われることを知らせると、メアリーは突然の出来事に狼狽する。シュルーズベリーがエリザベスに先駆けてメアリーの元へ訪れ、恩赦を得られるように、エリザベスの心へ訴えるよう助言する。メアリーとエリザベスが対面する。メアリーは耐え忍び、エリザベスの前にひざまずく。しかし、エリザベスの挑発的な言葉に、間もなくメアリーは我慢の限界に達する。両女王の誇り・嫉妬・敵対心が露呈し、二人は決裂し、メアリーの恩赦の道は閉ざされる。そばで様子をうかがっていたモーティマーは、愛するメアリーへ今晚中にも牢獄を破って救出すると伝えるが、彼の仲間の一人が早まり「エリザベス暗殺未遂事件」を起こしたため、計画は全て露見してしまう。

第4幕 控えの間／処刑1日前

モーティマーの仲間が引き起こした「エリザベス暗殺未遂事件」に、フランス大使オーベスピーヌが関与していたことが分かり、イングランドとフランスの同盟は破棄される。モーティマーはレスターの元へ急行し、彼がメアリーと通じていたことも露見していると知らせる。モーティマーは一旦、ここを退き、体勢の立て直しを図ろうとするが、レスターの裏切りに遭い、絶望のうちに自殺する。

エリザベス女王の居間

レスターはエリザベスの元を訪れ、メアリーと通じていた理由を、敵の動静を内偵していたからだと上手く釈明し、事態を切り抜ける。市街では暗殺未遂事件を受け、メアリーの処刑を望む声が一気に高まっている。シュルーズベリーはエリザベスに、刑の執行猶予を願い出る。エリザベスは一人になって対処を考える。女王としての正統性の弱さを高い徳で覆う必要があったため、血縁者殺しの汚名を避けようと、署名をためらっていた。だがメアリーと対面した今、エリザベスはこのような政治的な理由ではなく、メアリーに自尊心を傷つけられたため、宣告書に署名する。署名後、エリザベスは従者デイヴィソンにこの書面を渡すが、その扱いについては、彼に一任するという。デイヴィソンは、バーリーたちへ渡すべきなのか、今しばらく自身の手許に預かっておくべきか途方に暮れた後、結局バーリーへ渡してしまう。

第5幕 フォザリングイの城の一室／処刑当日

メアリーは「バビントン陰謀事件」への関与という不当な罪による死刑を、自分が若い頃に犯した罪（夫・ダーンリー王殺害）の罰として受け止め、死に赴く。

控えの間

エリザベスはメアリー処刑の報告を待っている。ポーレットがそれを告げにやってくる。そして処刑後、レスターがイングランドを去ったことも知らせる。エリザベスは安堵することなく、震えている。そこへ、シュルーズベリーが現れ、「バビントン陰謀事件」にメアリーが関与していなかったことが判明したと報告し、再調査を願い出る。エリザベスは、まだメアリーが処刑されていないかのように装い、デイヴィソンへ宣告書の返却と再調査を命じる。バーリーが現れ、メアリー処刑が無事執行されたことを報告すると、エリザベスは激怒し、バーリーとデイヴィソンへ謁見禁止を命じる。臣下たちが去って行く。一人残ったシュルーズベリーもエリザベスを残し去っていく。臣下たちに去られたエリザベスは、移り気な臣下や国民が、やがて向けるであろう自身への非難の眼差しを予感しながら、立ち尽くす。

対談 — スリリングで濃度の高い舞台に

田中孝弥

林英世

戯曲を読み解く作業

田中 英世さんに初めて清流劇場に出演していただいたのは、二〇一四年の『イフイギーニエ』でした。

林 私の芝居をご覧になつたことがないけれど、依頼していただきたんですよ。

田中 飲み会でお話をしていた時に、嗅覚で、いけると思つたんです。大成功ですね。今や、ほぼレギュラーで出ていただいています。

今回も英世さんが軸になつて下さることを前提に、以前からやりたかったシラー作品の中から『メアリー・ステュアート』上演を決めました。メアリー役とエリザベス役のどちらかで少し迷いましたが、エリザベスをお願いしました。林 送つていただいた本を読んだ時、私はメアリー役ではないな（笑）、と思いましたよ。海外の古典作品は、学生に教える時の素材としては使いますけれど、役者として一本演じることはあまりありません。とにかくセリフ量が膨大です。二十年以上在籍していた劇団M.O.P.でのセリフを全部合わせても、清流劇場での一本分の方が多いのではないかと（笑）。その分、鍛えられます。相手が強ければ、こっちも力を出さざるを得ないんです。

田中 イタリアのダーチャ・マライニーの翻案版は近年も公演されました。これは二人芝居です。原版とも言うべきシラーア作品を上演するのは、日本では約三十年ぶり。俳優座が公演して以来です。

清流劇場の稽古では、必ず戯曲読解の日程を設けます。このセリフはどこにかかっているのか、日本語としての温度はどうなのか。

役者が言いやすいか言いにくいか。音読した時の聞こえ方も重要です。それらを検討していくます。日本語は、音を聞いた後、頭の中で漢字に変換して理解します。だからわかりやすい漢字に翻訳しないといけません。すでにある翻訳を読解して、上演台本としてどう仕上げるか。

役者には、ちょっと退屈かもしれませんね。

林 いえいえ、必要な稽古です。また、戯曲を全部上演すると大変な時間がかかりますから、どこをどうカットして、何を芯に残していくかも考える必要がありますね。

田中 そうです。今回は約半分をカットしての構成です。それから、関係代名詞で全ての文章がつながつているため、長くなると意味がわからなくなる。だから、三行ぐらいのセリフであれば三つのセリフに分けるような作業をします。テンをマルに変える、などわかりやすいでしょうか。

これらは僕からの一方通行ではなく、俳優たちと一緒にやります。英世さんのご意見は鋭いし、貴重なんですよ。気づかされることがたくさんあります。高く飛ぶためには深くかがまなければならぬ。それが戯曲読解だと考えています。

田中 戯曲の中では、エリザベスとメアリーは一度だけ出会います。ところが史実では会っていないんですよ。シラーには、二人が会つたらどうだつただろう、という作家的好奇心があつた。それが頂点に達して書かれたのが、出会いの場面でしょう。ですから、劇の構造的にはそこが昇りの極みです。けれども、作品自体のうまみは、出会つた後だと思います。急転直下、どんどん話が転がつていくんです。これは現代の作家も同じで、物語をどう収めるか。そこに作家がふだんどんなふうに生きているか、どんなことを問題視しているかが表れてくる気がします。シラーの性根は自由の希求ですから、面会後、人間はいかに不自由な生き物なのかどう強き基盤になつてしているのか。日本人にはなかなか想像できないですよね。

ただ、全部理解するのは難しいけれど、宗教が争いの原因になることもある、ということはわかる。それが大事です。

そのぐらい宗教は重要なことを把握していないと、登場人物が何をしゃべっているのか、なぜそういう行動をするのかもわかりませんから。



古典は現代に通じる

林 加えて、稽古の前に、どなたでも参加できる勉強会も開催されますよね。私にとっては、こちらも戯曲を読み解く大きな助けです。時代背景や社会状況等も教えていただける。

田中 イタリアのダーチャ・マライニーの翻案版は近年も公演されました。これは二人芝居です。原版とも言うべきシラーア作品を上演するのは、日本では約三十年ぶり。俳優座が公演して以来です。

清流劇場の稽古では、必ず戯曲読解の日程を設けます。このセリフはどこにかかっているのか、日本語としての温度はどうなのか。

林 私が演じるエリザベスにも長いセリフがありますが、いつたいどこで本当の本音を言うのか。考えるところですね。隠しているようでいて、本音というもののすら、自分でもわからなくなっている可能性もある。

エリザベスは勝手に女王の座につけられたわけですが、この位置がどれほど危うくもろいものか、すりこまれている。それまでに、頂点に立つた人があつという間に落とされるのをたくさん見てきているからです。ですから潜在意識の中では、感情にずっとブレークがかかつていては、ないか。そんなふうに演じられたらおもしろいと考えています。

田中 臣下たちが次々と去つていき、最終的にはエリザベスの孤独で幕が下ります。そういう意味ではシユルーズベリーが言う、エリザベスに対して寛大になつてほしいというところは大事ですね。

林 最後も重要ですし、怖いですね。特に「ご心配も無用でございましょ」とシユルーズベリーが言うところ。エリザベスは、その一言で人が死ぬ、という立場にいます。そこから見る世界は、いつたいどんなものなのか。一方庶民は、女王に判断を全部預けて、好きなことをワーッと言える。この構図は現代と変わりません。今の政治家に対して、問いたくなりますね。あなたの一言で世界は変わる。そういう位置に立つ緊張感を持つっていますか？ エリザベスほど孤独になる覚悟を持つていますか？ と。ツイッター等でいろいろ言つている庶民も当時と重なります。どつちもどつち、勝手なことを言つてばかりではいけない。

田中 現代に通じるから、古典は残つていていますね。

林 その上、シラーゲーは男性たちが廻りを取り囲んでいるから、重層的でおもしろい。

エリザベスは、女性が高い位置に上つても、結局は男性に操られる例をいろいろ見てきました。だから、男性に頼るメアリーのことを、興味はあるけれど愚かな人と感じているのではないでしようか。同時に、出自に対する嫉妬があると思います。

田中 こういう古典作品は、語りが大事です。リズムとテンポというよりは、言葉によつて、空間や世界をいかに造型していくか。だから、英世さんがひとり語りで培つてこられた力は大きい。稽古場でも皆を引っ張つて下さります。

林 繩をかけてね（笑）。



一齊に作品に向かう

田中

英世さんは演出の僕よりもよく戯曲を読みこんでいらっしゃいます。新作オリジナルは作家の頭の中にしかないから、解釈等をでっち上げられる（笑）部分がある。しかし古典は戯曲も評論もあります。何より研究論文があります。僕は、なるべく入手した資料を公演に携わる皆さんに配るようにしています。演出家と俳優とスタッフに上下関係はなく、役割の棲み分けがあるだけ。作品に一齊に向かっていくので、平等性が高いんです。同時に、戯曲をきちんと読めていないとバレてしまう怖さがあります。稽古場はシアターです。行きたくないとか胃が痛くなるとか、皆、それぞれ闘っていますね。

林 この公演に携わったから、新しい何かを見つけた。だからまたこういう舞台をやりたい、と思つてもらえたらいであります。私はひとり語り公演をライフルワークにしていましたが、そこで活字を読み込む作業をしてきました。ひとり語りと古典が関連しているんですね。

対談まとめ：広瀬依子





作品解題

柏木貴久子

(関西大学教授・清流劇場・ドラマトウルク)

フリーードリヒ・シラー（一七五九～一八〇五）による悲劇『メアリー・スチュアート』（ドイツ語原題『マリア・スチュアート』）は、一七九九年に執筆が始められ、一八〇〇年六月十四日、ワイマールの宮廷劇場で初演された。シラーが前年に居を移し、ゲーテとの親交を温めた土地での公演は大成功を納め、すぐに追加の上演が求められた。翌年にはベルリンで上演されるとともに、出版もされた。スコットランド女王の名を冠したこの作品は、古典的形式に則った模範的な劇作品として知られ、理想的戯曲に必要とされる三つの統一性を有すると評される。全てのプロットが最終的にメアリーの運命へと収束する展開の統一性がはつきりしており、また舞台となる場所の統一性（メアリーが囚われているフォザリングイ城、敵対するエリザベス女王がいるウエストミンスター城という隣接する二つの場所）、緩やかな時間の統一性（一五八七年メアリー処刑までの連続した三日間）が実現されている。

この作品の評価は、形式上の完成度だけではもちろんない。時代を超越した古典作品に向けられる崇拜に対してもむしろ批判的であつたシラーは、過去の歴史を題材にしながら、それが解釈され、現実と結びつけられることを求めた。「歴史は私の想像力のための倉庫でしかない」（一七八八年十二月十日付け書簡）とシラー自身が語るように、波乱の生涯を送つたメアリーは、題材として有効に使われながら、人物像には独自の脚色が加えられている。

メアリーとエリザベスという対照的な女王の対決を軸にしたこの作品において、二人が担うのはさまざまな対立項である。まずはスコットランドとイングランドという国家の対立。イングランド、ウェールズ、スコットランド、アイルランド（後の北アイルランド）の四つの国を、われわれは時に明確な区別なしに扱いがちだが、イギリスは正式には「グレートブリテンおよび北アイルランド連合王国」であり、連合への道のりは平坦ではなかつた。大国イングランドに接し、ヨーロッパ諸国のパワーゲームに翻弄されたスコットランドが、連合に合併されたのは一七〇七年である。一五四二年メアリーは父王の病死に際し、國家存続のためにわずか生後六日で即位となる。彼女はスチュアート王家の血を担う存在であると同時に、祖母を通じてイングランドのチューク一家の血も引くために、王位継承の争いに巻き込まれる運命にあつた。イングランドを治めるエドワード六世に世継ぎがないために、その死後は、異母きょうだいである長女メアリー、次いで次女エリザベスに王位が移ることになるのだが、父王の度重なる結

婚で、二人の姉は庶子扱いされていた。そこでチューダー家の血を引くスコットランドのメアリー女王は、イングランドの王位継承権を優位に主張できる立場となる。身の安全のために五歳でフランスに渡り、対イングランドのスコットランド・フランス同盟を遂行するべく十五歳でアンリ二世の息子フランソワ（後のフランソワ二世）と結婚したメアリーは、まさに三冠を頂くかもしれない女王だつたのだ。結婚式が春のパリで行われた一五五八年の秋、ロンドンではエリザベスが即位し、エリザベス一世となる。フランスはメアリーのイングランド王位継承を主張し、かの地はエリザベスの嫡子権を議会で認めることで対応するが、これは二人の女王の確執の始まりとなつた。

国家の対立は、宗教対立とも密接に関わる。免罪符の発行に象徴される教会の腐敗に対し否を突き付け、聖書のことばに戻るべきだと抗議する人々、プロテスタンントの波は、イングランドにも届いていた。十六世紀は一五一年ルターの抗議に始まる改革の世紀であつた。キリスト教はカトリックとプロテスタンントに二分されたが、それにどう対処するか、施政者は問われる。再婚問題でローマの総本山ともめたことを契機に、イギリス国教会という独立路線に舵を切つた父ヘンリー八世に倣い、エドワード六世とエリザベス一世は国内宗教改革を進める。途中、姉メアリー一世の統治の時にはカトリックに戻り、プラッディ・メアリーの異名を取る彼女はプロテスタントを迫害し、国内を混乱させたが、エリザベス一世はプロテスタントとして、父と弟が進めてきた改革を完成させた。国王を宗教上の首長と定める首長法、礼拝の様式を定めた統一法、一般祈禱書が制定された。一方スコットランド女王メアリーは改革否定派である。彼女はカトリックへの帰依を、同じカトリック国であるフランス滞在中さらにつけていた。その信仰心の強さはシラー作品でも描かれている。女王渡仏後のスコットランドでも改革の嵐は起こり、有力貴族たちはローマから独立した独自の教会組織を求め、プロテスタンント信仰への盟約書を出した。このような状況下で帰国したメアリーは信仰の選択には寛容を見せたが、自らの信仰は変えなかつたため、女王に付くか否かを巡り、国内での宗教分裂は続いた。また男性に対して思慮に欠ける行動をとつた。フランソワの死後に再婚し夫が王となることを約束するなど破格の待遇を与え、カトリック宗教上も王位継承上でも、国内を混乱させた。その後の夫婦の不仲、ダーンリー

卿暗殺事件、その首謀者とされるボスウェル伯との結婚は混乱を助長させ

るばかりで、結局廃位となり、エリザベス女王の保護を求める事となる。

二度目の夫ダーニリー卿との間に生まれた子供が、後にジェイムズ一世と

してイングランドを治めることになるのは皮肉である。

シラー作品では女王たちは若く、メアリーは母ではないし、エリザベス暗殺計画にも無関係という設定である。二人の対照性は登場の場面によく表されている。十字架を抱くメアリー、臣下を従えるエリザベス、運命に翻弄された後、静かに祈りを求めるメアリー、女王という立場を常に演出しなければならないエリザベス。そこでは統治者という立場から降りた者とそこに居続けなければならない者という立場の相違が示される。二人のセクシユアリティも対照的で、三人の夫と愛人を経験し、美人の誉れ高く、幽閉中も男たちを魅了し続けるメアリーに対し、エリザベスは自立と自尊心を重んじ「処女王」でいようとするために結婚を躊躇し、愛人に對しても心を開かない。それはフランス宮廷の優雅さを身に付け、感情のままに行動してきたメアリーと、庶子か嫡子かという圧迫のなかで育ち、自己防衛と冷静さを持たざるを得なかつたエリザベスの生い立ちと関連し、二人は官能と純潔として対置される。さらに二人の相違は、感覺に作用する典礼、教会の儀式が特徴的なカトリックと、聖書のことばの伝達に重きを置くプロテスタンントの厳格さとの対照にもつながっていく。そして二人が対面するクライマックスのシーンでは、様々な対立要素を越えて、どんなに抑制しようとしても抑制しきれない人間の感情が露わになる。

この作品は宗教的政治的対立を大枠に、人に課せられた社会的役割とモラルの葛藤、行動と心の乖離を描いてみせる。作品執筆の際、シラーは、舞台は人々を教化するものだという啓蒙主義的な考え方から距離をとり、演劇が観客に与えることができる美的経験、美の働きがもたらす自由に着目するようになっていた。啓蒙主義の理性第一主義ではなく、心の琴線に触れる芸術の力に可能性を見出しつつ、「私たちは美のもとにおいて自由に感じる、なぜなら感覚的な欲望が理性の掟と調和するからだ」とシラーは考え、そのような美を備えた魂を作品中のメアリーに託した。彼女の最後はそのような「美しき魂」の具現だろうか。天上のマリアを信奉する青年モーティマーは、彼女を「地上のマリア」と崇めるが、それはまた偶像崇拜でしかない。処刑を直前にしたメアリーの心の平静は、運命の肯定であり、諦念に似た苦悩の終わりでもある。処刑の命を下したエリザベスは、その重みを背負い続けることとなる。それでも人は生き続けなければならない。彼女は最後にどのような表情を見せるのだろうか。

フリー・ドリヒ・シラーの文学の魅力

津田保夫

(大阪大学教授)

ゲーテと並び称されるドイツの文豪フリー・ドリヒ・シラーは、日本では何よりもまずベートーベンの交響曲第九番合唱の歌詞『歓喜に寄せて』を書いた詩人として知られています。あるいは、我が子の頭の上に載せたりシングを弓矢で射る『ヴィルヘルム・テル』を思い浮かべる方もいらっしゃるかもしれません。とはいえた今日の日本では、今回上演される『メアリー・ステュアート』も含めて、シラーはあまり読まれることはないようです。実際、シラーの作品の邦訳は現在ではほとんどが絶版や品切れで、入手しにくい状態になっていますので、それもやむをえないのかもしれません。

しかし、戦前にはシラーの多數の著作が翻訳出版され、多くの人々に読まれていました。当時シラーを愛読し、大きな影響を受けた作家の一人が太宰治です。太宰はシラーの『人質』という詩から題材を得て小説『走れメロス』を書いていますし、また慶應義塾の学生新聞に掲載したエッセイ『心の王者』では次のように述べて、学生たちにシラーを読むことを勧めています。「シルレルはもつと読まなければいけない。今のこの時局に於ては尚更、大いに読まなければいけない。おほらかな、強い意志と、努めて明るい高い希望を持ち続ける為にも、諸君は今こそシルレルを思い出し、これを愛読するがよい。」では、太宰はシラーのどこにそれほどの魅力を感じたのでしょうか。

エッセイ『心の王者』で、太宰はシラーの『地球の分割』という詩を紹介しています。その中では、神の父ゼウスが地球を分割して様々な職業の人間たちにすべて分け与えてしまったあとで、詩人だけが遅れてやつてきます。ゼウスが理由を尋ねると、詩人はゼウスのそばにおいて、その顔をずっと見ていた、その調和の調べをずっと聴いていたので、神の光に酔いしれて地上のことをすっかり忘れてしまつていたと答えます。地上にはもはや分配してやる土地は残つていなかつたので、ゼウスは詩人に神々とともにに天上世界で暮らすことを許すのです。

この詩が意味しているのは、詩人は神々のいる天上世界に住む者であつて、地上の現実世界には居場所をもたないということです。したがつて、詩人にとつて現実世界は非常に生きにくいものとなります。太宰自身そのような人間世界での生きにくさ、居場所のなさ、疎外感を強く感じています。したがつて、有名なフレーズがありますが、これはまさに本来は別の世界に所属する自分が場違いな人間世界に間違つて生まれてしまつたという違和感を表現しています。このような感覺こそシラーの文学の根底にあるものでした。これをスイ

スの高名な文学研究者エーミール・シュタイガーは、その著書『フリードリヒ・シラー』の中で「生の異郷」(Fremde des Lebens)と呼んでいます。これは戯曲『ヴァレンシュタイン』の中に出てくる言葉ですが、シラーには地上の現実世界は故郷ではなく異郷であつて、本来の自分の居場所ではなく、非常に生きにくいところだつたのです。そのような彼にとつて重要な意味をもつていたのが文学であり芸術でした。シラーは戯曲『ヴァレンシュタイン』のプロローグを「人生は深刻だが、芸術は明るい」という言葉で締めくくつていますが、深刻な人生を明るく生きしていくためにこそ、文学や芸術が必要だつたのです。

これと同じような人生観や芸術観を夏目漱石も持つていました。漱石は『草枕』の冒頭で人間世界の住みにくさについて書いています。「とにかく人の世は住みにくい。住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくないと悟った時、詩が生れて、画が出来る。」漱石はさらに、詩人や芸術家の意義について次のように説明します。「越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか、寛容で、束の間の命を、束の間でも住みよくせねばならぬ。ここに詩人という天職が出来て、ここに画家という使命が降る。あらゆる芸術の士は人の世を長閑にし、人の心を豊かにするが故に尊い。」

漱石は続けて、「住みにくき世から、住みにくき煩いを引き抜いて、ありがたい世界をまのあたりに写すのが詩である」と述べますが、そのような「あら世界をまのあたりに観る」という、芸術的観照の態度の方を重視します。つまり、人は詩や芸術の観照的態度によって、現実世界を超越して自由な心の境地に達することができるのです。そのような詩人や芸術家について、漱石は次のように言います。「かく人世を観じ得るの点において、かく煩惱を解脱するの点において、かく清浄界に入出し得るの点において、またこの不同不二の乾坤を建立し得るの点において、我利私慾の羈絆を掃蕩するの点において、——千金の子よりも、万乘の君よりも、あらゆる俗界の寵児よりも幸福である。」

漱石の『草枕』冒頭部分に見られるこのような芸術観は、シラーのものと驚くほど一致しています。シラーは芸術作品が作り出す現実とは異なる世界を「仮象」(Schein)と呼びました。仮象の世界では、人は現実の利害関心を離れて自由に遊ぶことができます。そして、この芸術の仮象世界での自由な遊戯で調和的な心を育成することによつて、人は現実世界でも心の自由を保ちつつ、深刻な人生を明るく生きていけるようになります。この考え方を、『美的教育書簡』の中で展開しています。

さて、今回上演される『メアリー・ステュアート』は歴史から題材を採った悲劇作品です。シラーは『崇高について』という論文の中で歴史と悲劇について論じ、歴史は人間が呵責ない運命の前に破滅し不幸になる出来事

を豊富に提供し、それを悲劇作品は莊重な姿で描き出すと述べています。『メアリー・ステュアート』で描かれているのは、メアリーとエリザベスという二人の女王の対立と、それに起因する二つの悲劇ですが、それは個人の意志を超えた歴史的な宿命によつてもたらされたものでした。しかし、二人の女王を襲う悲劇はそれぞれまったく性質を異にしています。

メアリーは政治的にはエリザベスに完全に敗北し、無実の罪によつて死刑に処されますが、その不当性も過去に犯した夫殺しという別の罪に対する罰として受け入れ、心の平和を得て從容として死に赴きます。これはある意味では一つの勝利ともいえるのですが、この勝利は生命という現実世界でもつとも大事なものを代償として支払うことによつてしか得られないという点に、メアリーの悲劇性があります。

これに対してエリザベスの悲劇性はやや複雑です。彼女は政治的な権力を安定させるためにメアリーを排除することを望んでいますが、国民の非難を恐れて、死刑執行に署名することは躊躇せざるをえません。そのような身動きのできない状況の中で、彼女は「生きることにも支配されることにも疲れ果て」てしまい、刺客の手からかろうじて救われたときにも、「あの一突きで一切の戦いが終わり、私は静かな墓地に安らうことことができたのに」と嘆き、自らの死すら望むほどの不幸な状況にあるのです。

最終的にメアリーの死刑は執行されますが、それはエリザベスの意図というよりも、むしろ偶然的な運命によつてもたらされたものでした。そしてそのために彼女は新たな窮地に陥ります。寵愛していたレスター伯爵はイングランドから逃亡し、信頼していた重臣のシユルーズベリーも職を辞して去つていきます。怖っていた敵メアリーが倒されたことによつて、エリザベスは権力の基盤を安定させることはできましたが、國民から畏怖されはしても、愛されはしないでしょう。それでも彼女はイングランドの女王として、國家や國民を守つていくという重大な義務を負わされています。そのためには一人の人間としての個人の幸福を犠牲にしなければならないのです。

誰からも愛されることなく、これほどの重責を担つて、たつた一人で孤独に耐えながら寂しく生きていかなければならぬというのは、死ぬよりも死ぬかにつらいことかもしれません。最後のシーンで「無理に気を取り直し、静かな落ち着きを見せて毅然と佇む」エリザベスの姿は、まさにそのような彼女の悲劇性を表しています。

現実の世界で起つる実際の出来事とは異なり、芸術作品として舞台上で演じられる悲劇はたんなる仮象ですから、私たちは観客として現実的利害関心から離れて、自由な気持ちで落ち着いて鑑賞することができます。そのような境地から、歴史の宿命に毅然として立ち向かう二人の女王たちの悲劇を、ぜひ思う存分味わつてください。

メアリー・ステュアート Maria Stuart

□原作：フリードリヒ・シラー

□構成・演出：田中孝弥

□翻訳：岩淵達治

□ドラマトゥルク：柏木貴久子

□出演：林英世・西田政彦（遊戯舎）・上田泰三（MousePiece-ree）・

高口真吾・阿部達雄・竹田朋子（演劇集団よろずや）・

倉増哲州（南森町グラスホッパーズ）・オオサワシンヤ

□音楽・演奏：仙波宏文

□特別協力：森和雄・大野亜希

□スタッフ：

舞台監督：K-Fluss 舞台美術：内山勉 舞台美術アシスタント：新井真紀

照明：岩村原太 照明アシスタント：塩見結莉耶 照明オペ：木内ひとみ

音響：上野智也（株夢咲）衣装：植田昇明（kasane）小道具：濱口美也子

写真：古都栄二（有テス・大阪）ビデオ：（株）WAVIC

WEB・制作協力：飯村登史佳 宣伝美術：（株）cursor（カーソル：岡田ゆうや）

ビジュアルヘアメイク（フライヤー表面）：KOMAKI（kasane）

協力：一心寺シアター俱楽・ボズアトール・座・九条・（有）ウォーターマインド

（有）ライターズ・カンパニー・（株）舞夢プロ・イズム

丹下和彦・市川朋・津田保夫・廣瀬依子・堀内立誓・佐々木治己・川口典成・

嶋田邦雄・山下智子・森岡慶介・居原田晃司

制作：永朋 企画：清流劇場

□公演日程：

2017年

10月19日（木）19時

10月20日（金）19時

10月21日（土）15時（終演後、アフタートークがあります）

10月22日（日）15時

※日本語による上演です。ドイツ語の字幕はありません。

ohne deutschen Untertitel

※日時指定・自由席です。

※小学生以下のお客様はご入場になれません。

※会場内の飲食喫煙・写真撮影は禁止です。

◎アフタートーク・パネラー

津田保夫（大阪大学教授）

柏木貴久子（関西大学教授・清流劇場ドラマトゥルク）

田中孝弥（清流劇場代表）

□会場： **Ai-HALL** 伊丹市立演劇ホール

〒664-0846 兵庫県伊丹市伊丹 2-4-1 TEL072-782-2000

WEB : <http://www.aihall.com/>

□お問い合わせ：

清流劇場 WEB : <http://seiryu-theater.jp>

E-Mail : info@seiryu-theater.jp

□メンバー募集

清流劇場の活動に興味のある方、俳優・スタッフに興味のある方は、劇団まで、一度ご連絡下さい。連絡先：info@seiryu-theater.jp

清流劇場ウェブサイトでは、過去の作品のダイジェスト映像や舞台写真を公開しております。是非、ご覧下さい。

□作家紹介

フリードリヒ・シラー Friedrich Schiller

(1759～1805)

ドイツの詩人・劇作家。

南ドイツのヴュルテンベルク公国領、ネッカー河畔の小さな町マールバッハの生まれ。領主カール・オイゲン公に強制されてカール学院（軍人官吏養成学校）で法律、医学を学ぶ。卒業後はシュトゥットガルトの連隊付き医官となる。18世紀後半の文学革新運動「疾風怒涛 Sturm und Drang」の影響を受けて、在学中に書いた処女戯曲『群盗』がマンハイムで初演（1782）され、大成功を収める。のち故郷を離れてドイツ各地を放浪。歴史研究やカント哲学・美学の研究を経て、ゲーテと並ぶドイツ古典主義文学の代表者となった。1799年にヴァイマルに定住。

1805年、長年患っていた肺の病により死去。

作品に『群盗』、『たくらみと恋』、『ドン・カルロス』、『ヴァレンシュタイン』三部作、『オルレアンの少女』、『ヴィルヘルム・テル』、評論『素朴文学と情感文学について』、詩『歡喜に寄す』（ベートーヴェンの交響曲第九番）などがあり、自由を求める不屈の精神が描かれている。

□上演にあたって

16世紀の実在の人物、スコットランドの女王メアリー・ステュアートとイングランドの女王エリザベスをモチーフに書いたシラーの歴史劇を上演します。この作品は、メアリーが処刑される最期の日々を、濃密な数日間に構成した悲劇です。しかし、ノンフィクションのドラマではありません。日本でも歴史に素材をとりつつ、一部フィクションを取り入れて、より魅力的な世界を書く作家さんがいらっしゃいますよね。シラーという作家も同様で、歴史を素材にした演劇、つまり、完全なオリジナルではなく、ある一定の枠組み（制約）の中で、フィクションを交えつつ書いた作品がこの『メアリー・ステュアート』です。ですから、史実にはないキャラクターを一部登場させ、史実にはない人間関係も組み込まれています。いわば、フィクションとノンフィクションが混ぜ合わさったハイブリッドな演劇と言えます。この混ぜ合わせの塩梅が絶妙です。たとえば、この作品でよく言われる《見せ場》の一つに、物語中盤に配置されているメアリーとエリザベスの両女王が対決するシーンがあります。しかしこれも、実際の歴史では二人は出会わなかつたようです。史実にはないこの女王対決は、誇りと嫉妬が渦巻き、激しい人間の感情が発露します。一見、「魚売りのおかみさんのケンカ」にも見える、この自然な感情の発露も、《生きにくい世の中》をより良く《生きる》ためにシラーが考え出した手立てだったのかも知れません。

シラーは子供の頃から優秀だったため、故郷の領主オイゲン公の命により、本人の意志とは異なり、厳しい学校に入れられ、軍医になることを強いられました。そして、密かに書いた戯曲『群盗』が評判になってしまって、「権力に対して反抗的だ」という理由で、書く行為も禁じられたようです。シラーは生涯にわたって《自由》を求めていました。若い頃は《身体的な自由》を。やがて、《精神的な自由》を。

シラー成熟期に書かれたこの物語はメアリーの死とエリザベスの孤独で幕を閉じますが、このハイブリッドな歴史悲劇は《人間の眞実》に迫り、生きていく上で不可欠な《精神的な自由》を描き、作家自身もこの作品を通して《より良く生きる》ための支えにしようとしたようにボクには思えます。今からボク自身も上演が楽しみです。

——田中孝弥

Maria Stuart



Das ist das Fluchgeschick der Könige,
Daß sie, entzweit, die Welt in Haß zerreißen,
Und jeder Zwietracht Furien entfesseln.



平成29年度(第72回)文化庁芸術祭参加公演

AI·HALL 提携公演